

国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向

頭川 昭子・林 裕子*
松浦 義行・若松 美黄・和田 伊通子**

A tendency of dance works won in a international creative dance contest

Akiko ZUSAWA, Yuko HAYASHI*,
Yoshiyuki MATSUURA, Miki WAKAMATSU, and Ituko WADA**

The purpose of this study was to clarify a tendency of dance works won in a international creative dance contest. The problems were solved through analyzing characteristics of dance movements and investigating the images of the dance in semantic space. Five prize dance works which were accepted by judges in The Fourth Saitama International Creative Dance Contests at Saitama Kaikan were selected for this study. The dance works, about 12 minutes each were filmed on 8mm video tape in January, 1989.

In order to analyze a tendency of movements in the dance works, amounts of movement time(seconds) to be used in the works were measured by the five points of views such as kinds of dance movements, touch of a person to a person, movements in unison, touch of a person to floor, and time and space were measured. While, in order to measure a tendency of dance images in those, the 46 semantic differential scales which were originally developed by authors were utilized. One hundred twenty five college students responded to 46 semantic differential scales in each of 5 different concepts as stimuli. Multivariate statistical analysis procedures were applied. As the results, the following inferences were derived;

1. In kinds of dance movements of the 5 dance works, amounts of movement time in staying in space and steps were found to be used much more than the other kinds of dance movements in each dance work. However, those of jump, turn, and balance movements were found to be used less than the others. It was suggested that the movements of small amounts of time were composed as accents for dance works.

2. Amount of movements time used in touch of a person to person, movements in unison, touch of a person to floor, and compound movements were found differences among dance works. It was suggested that these movements were elements for characterizing the dance works.

3. Significant differences of images between dance works were found in lucidity, energy, and flexibility dimensions in semantic space. It was suggested that each dance work was unique.

4. All five dance works were imaged in the directions to beautiful in beauty dimension as a important factor in dance, and the direction to individual in individuality dimension as a social element. It was suggested that the dance works were higher levels in the creativity and dance technique.

5. The prize dance works were found to be closely relationship between the contents of dance

* 三井鉱山

** 和田朝子舞踊研究所

works and the dance movements and semantic images.

Therefore, it was found that the prize dance works had each characteristic in the dance movements and the images. Furthermore, in the works the inventions of choreographers expressed through higher levels dance techniques.

Hence, it is inferred that a tendency of dance works won in a international creative dance contest is clarified through analyzing dance movements and semantic images in dance works.

Key words : Dance, Images, Movement analysis, Factor analysis, Semantic differential method, Dance works and International creative dance contest

緒 言

現代における舞踊作品には、様々なレベルや特徴がある。日常生活の中で用いられる動きを基にしたものから、高度な意図や表現技術を必要とするものまで。また、誰にでも踊れるものから、訓練された演者によるものまで。更に、劇的、叙情的、叙事的なものから、表現運動を組み合わせた抽象的なものまで。それらは、街の広場、学校の体育館、劇場の舞台で踊られ、時には衣裳や、照明が工夫されたり、されなかったり様々である。

このような舞踊作品は公的に発表された時、作者から観客に伝達されて始めてその審美的な、社会的な価値が論じられる。作者の意図を含む作品そのものも、観客の個人的な印象も様々に異なる主観的な美的判断によるものであるが、発表された作品は何らかの方法で分析が行なわれ、作者にフィードバックされる。

舞踊作品の分析は、頭川ら (1989) が舞踊作品の部分が全体のイメージの中でどのように位置付けられるかを作品に含まれる運動との関連で分析した。しかし、本研究では作者の創意が高度な表現技術を媒体として競われる国際創作舞踊コンクールにおいて発表された作品の中から、審査員によって評価された入賞作品の傾向を演者の表現運動と作品のイメージが分析されることによって推察された。

本研究の対象とされた第4回埼玉国際舞踊コンクールは、舞踊における創造性を重視することを目的に掲げ、埼玉県舞踊協会創立15周年記念のために全日本舞踊大賞選考フェスティバル/バレエ・モダンダンス公演として、昭和57年1月7日に創設され現在に至っている。参加国は海外からは韓国、中国、フィンランド、米国、ベルギーなどの5カ国から6作品の参加があり、国内とあわ

せて17作品で大賞が争われた。その中で入賞した作品を取り上げ、VTRに収録された2次元空間の舞踊作品の特徴が分析された。

入賞作品の特徴は、舞踊作品を構成する最大の要素である表現運動イメージを分析することによって推察された。即ち、作品が作者から観客に伝達される過程において、舞踊において人の精神的経験がその身体を通して直接に示され、身体の作り出す時間的・空間的な要因を持つ運動を通して舞踊内容が伝達される。しかし、また作品のイメージは、表現運動とそれに伴う衣裳、音響、舞台における照明、装置などを含む総合的な伝達要因によってもたらされる。これらのことから、本研究の分析対象となる入賞作品の運動の特徴は、運動の種類、運動の時間的要因、空間的要因、集団的要因から分析された。また、作品のイメージは意味差別法で得られた多数の人々のイメージを、多変量統計解析を用いて導き出された意味空間において分析された。更に、両者の分析結果は作者の意図との関連で入賞作品の傾向が推察された。このような高度なレベルの舞踊作品がどのような表現運動を含み、どのようにイメージされるかを知ることは、作品の構成・創作の伝達度を高めるための手掛かりとなると考えられる。

1. 問題の設定

本研究は、国際創作舞踊コンクールにおいて審査され、入賞した作品の傾向を、運動とイメージを分析することによって、作者の意図との関連で推察することを目的とする。

1) 入賞作品の表現運動の傾向は、作品を運動の種類、運動動作の時間的要因、空間的要因、集団的要因から分析され、作品間の視覚的差異点と共通点から明確にされる。

2) 入賞作品のイメージの傾向は、意味空間に

おけるイメージの分析から、作品間のイメージの差異点と共通点から明確にされる。

3) 入賞作品の傾向は、運動分析とイメージ分析から、作品の意図との関連で明確にされる。

2. 仮説

1) 作品には各々特徴が見られる。

2) 作品の表現運動イメージは作者の意図する内容と関連がある。

3) 入賞作品全体の傾向が見られる。

3. 研究の限界

1) 研究対象とされたコンクールは、第4回埼玉国際創作舞踊コンクール決勝大会である。

2) 入賞作品は各々約12分の5作品であり、作品はビデオ・テープによって分析された。

3) 問題解決のために運動分析、イメージ分析が行なわれた。

4. 研究の立場

選択された作品の芸術的価値そのものが検討されるものではなく、作品に用いられた運動の分析と、作品のイメージを分析することを通して、入賞作品の傾向が検討された。

5. 研究の独自性

国際的に水準が高く、創造性が競われる舞踊コンクールが選択され、その入賞作品の傾向が検討されるために、VTRから得られた資料をもとに、3名以上の集団で構成された作品の表現運動を独自の観点から分析したこと、意味空間におけるイメージと作者の意図との関連でその傾向を推察した点に独自性がある。

方 法

本研究の分析の資料として、昭和63年1月30日(土)14時から19時に、埼玉会館大ホールで行なわれた、第4回埼玉国際創作舞踊コンクール決戦大会の参加17作品が、ビデオコーダー(SONY CCDV-30W)で、8mmビデオフィルム(SONY P6-120MP)に収録された。その内、入賞作品の5作品が、作品の上演順にビデオテープ(SONY Beta L-500, 6-120MP)にダビングされて、運動分析とイメージ分析のための資料とされた(Table 1 参照)。

1. 運動分析の方法

1) 資料の収集

選択された5作品は、8mmビデオフィルムからビデオテープ(Beta)にダビングされた。更に、

Table 1 第4回埼玉国際創作舞踊コンクール入賞作品

作品番号	作品の題名	作者	出演者数
1	屋根の下	K.F.	3名
2	悲劇の相貌	R.S.	3名
3	SENSATIONS・感覚	M.V.H.	5名
4	北の春	N.K.	7名
5	EMANCIPATE・解き放つ	S.M.	3名

Table 2 舞踊作品の運動分析(その1)

分析の観点	
A 運動の種類	
1. ジャンプの非移動系	2. ジャンプの移動系
3. 回転の非移動系	4. 回転の移動系
5. バランス	6. ステップ
7. 静止	8. その場の動き (上半身の動き)
9. その場の動き (下半身の動き)	10. その場の動き (全身の動き)
11. 複合	12. 群舞の複合
B 人と人との接触時間	
C ユニゾン	
D 人と床との接触時間	

8mmビデオフィルムにダビングされ、同時に1秒毎の時間がテープに記録され分析された。

(1) 作品の運動分析(その1)

作品の運動は作品の長さに対する時間として、次の4点から4回分析された(Table 2参照)。

A. 運動動作の種類の種類: 各々の作品を始めの部分から10秒ごとに区切り、その10秒間はすでに定められた7種類の動き、即ち、ジャンプ、回転、バランス、ステップ、静止、その場の動き、複合に分類された。更にこの7種類の動きについてジャンプは非移動系、移動系、回転は非移動系、移動系、その場の動きは上半身の動き、下半身の動き、全身の動き、複合は全体の複合と群舞の複合とに分類された。

B. 接触時間の分類: 演者の内の誰か一人でも他の人に触れていれば接触とみなし、その秒数に数えられた。

C. ユニゾンの分類: 演者全員が同じ動きをしている場合をユニゾン、それ以外を非ユニゾンとみなし、その秒数に数えられた。

D. 人と床との接触時間の分析: 足底から膝ま

Table 3 舞踊作品の運動分析 (その2)

分析の観点	運動の種類
A 時間的静止	バランス(5) 静止(7)
B 固定空間内動作	ジャンプ(1) 回転(3) 上半身の動き(8) 下半身の動き(9) 全身の動き(10)
C 時間的・空間的移動	ジャンプ(2) 回転(4) ステップ(6)
D その他	複合(11) 群舞の複合(12)

() : 舞踊作品の運動分析 (その1) の運動の種類番号

での部分以外が床と接触している場合に限り接触とみなされた。また、演者の内の誰か一人でも床に触れていれば、接触とみなしその秒数に数えられた。

(2) 舞踊作品の運動分析 (その2)

上述の運動分析 (その1) で得られた結果をもとにして、時間的・空間的分析は次の4点にまとめられた (Table 3参照)。

- A. 時間的静止：時間的流れの中で静止状態にある動き。
- B. 固定空間内動作：空間的に静止状態にある動きと移動を含まない動き。
- C. 時間的・空間的移動：時間的にも空間的にも、移動している動き。
- D. その他：非移動系と移動系の両方を含む動き。

2) 資料の処理

得られた資料は、秒数が作品毎にパーセントで表わされ、更に作品毎の分類内容間と作品間の有意性がカイ自乗テストで検定された。

2. イメージ分析の方法

1) 資料の収集

舞踊のイメージの測定のために抽出された、46個の両極性を持つ形容詞対の意味尺度 (1980) が用いられた。意味差判別の調査法で1988年8月～9月にかけて、富山女子短期大学保育科1年生女子と筑波大学体育専門学群2年生女子の125名が、5刺激として入賞作品に反応した結果が資料とされた。

2) 資料の処理

(1) 5刺激に対する5段階評定の尺度値をもとにして因子分析が行なわれた。即ち、得られた資料をもとに、46尺度相互間の相関係数をピアソンの方法で求め、Z変換を経て平均相関行列を出し、

これに主因子解法を適用し、固有値1.0以上の因子を取り上げ、Normal varimax 基準による直交回転を行ない、多因子解が出された。この結果から因子負荷量の符号の一致を考慮して、再度因子分析が行なわれ、2回目の多因子解が選択された。

(2) 重相関分析を用いて意味次元と意味尺度が決定され、平均係数が算出された。刺激間の距離はユークリッドの距離によって算出された。また、意味スコアは各刺激に対する被験者の尺度の反応値と平均係数をもとにして決定され、t検定を用いて有意差が判定され、意味空間における作品毎のイメージの差異が推察された。

(3) 各意味次元毎に各刺激の意味尺度に関する意味差判定値を算出し、加算した平均値から作品の意味の方向が確認された。

研究結果とその考察

1. 舞踊作品の運動分析

1) 各作品の運動の特徴

(1) 運動の種類では、作品1, 2, 3はその場、ステップが多く、作品4は複合、ステップが多く作品5は複合、その場が多く見られた。他の作品と比較すると、作品1はジャンプ、静止が多く、複合は全く見られなかった。作品2はステップが多く、ジャンプ、回転、静止は少なかった。作品

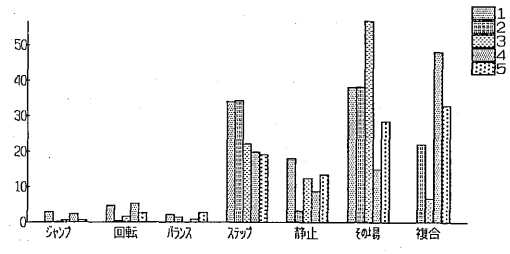


Fig. 1 舞踊作品の運動の種類

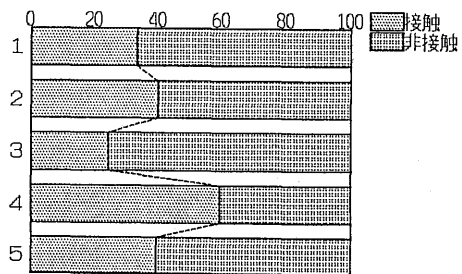


Fig. 2 作品の長さに対する人と人との接触

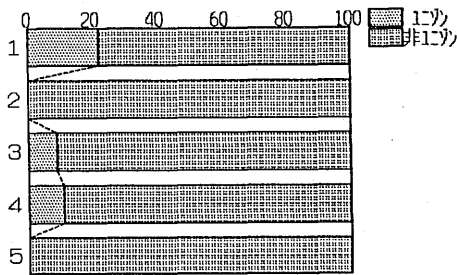


Fig. 3 作品の長さに対するユニゾン

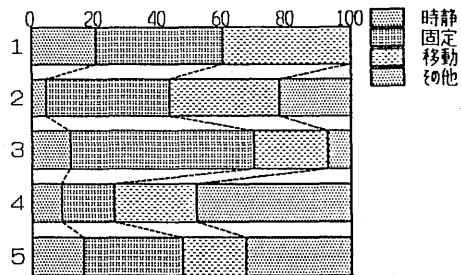


Fig. 5 時間的・空間的分析

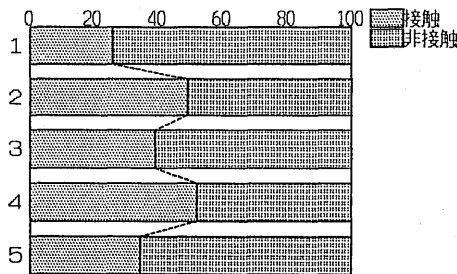


Fig. 4 作品の長さに対する人と床との接触

3はその場が多く、バランスは全く見られなかった。作品4は回転、複合が多く、その場が少なかった。作品5はバランスが多く、ステップが少なかった。全体の傾向としてその場は平均35パーセント以上で一番多く、次いでステップは25パーセント以上で多く、ジャンプ、回転、バランスは少なかった (Fig. 1参照)。

以上のことから、作品全体に占める割合はステップ、その場の動きが多く、ジャンプ、回転、バランスなどは、その作品のアクセントになっているのではないかと考えられる。

(2) 作品の長さに対する人と人との接触時間の割合は、作品1, 2, 3, 5が24.16~39.14パーセントで少なく、作品4は59.14パーセントで多く見られ、5作品間の有意差も見られた。全体の傾向としては作品4を除いて非接触時間が多く見られた (Fig. 2参照)。

以上のことから、入賞作品の多くは、人と人との接触時間がやや少ないと言える。

(3) 作品の長さに対するユニゾンの割合は、全作品において0.00~22.24パーセントで少なく、5作品間の有意差も見られた (Fig. 3参照)。

以上のことから、ユニゾンの時間の割合はすべての入賞作品において少なく、非ユニゾンの変化

のある動きが多いと言える。

(4) 作品の長さに対する人と床との接触時間の割合は、作品1, 3, 5で25.72~39.14パーセントで少なく、有意差が見られたが、作品2, 4は差異が少なかった。また、5作品間の有意差も見られた (Fig. 4参照)。

以上のことから床との接触に関する動きは、足底より膝までの部分以外が床に触れていることになり、これは動きの重心が下方にあることを意味する。しかし、全体に作品の垂直空間的な高位での運動がやや多いことを示していることになる。

(5) 時間的・空間的分析では、時間的静止、固定空間内、移動の割合の作品毎、5作品間に有意差が見られた。時間的静止の割合は作品1が一番多く、一番少ない作品2では、ほとんど見られなかった。固定空間内動作の割合は作品3が一番多く全体の半分以上を占めていたが、作品4が一番少なかった。移動の割合は作品1, 2でかなり多く見られ、作品5は一番少なくみられた。全体には作品4を除いて固定空間内動作が一番多く、次いで移動が多く、時間的静止は少なく見られた (Fig. 5参照)。

以上のことから、作品間の差異は見られたが、全体的には時間的静止より固定空間内あるいは移動して動いている時間が長いと言える。

2. 舞踊作品のイメージ分析

1) 多因子解からは6因子が抽出され、(1) 情緒性、(2) 力動性、(3) 審美性、(4) 調和性、(5) 独自性、(6) 弾力性と命名された。この6因子は全体の貢献量の42.987パーセントを占めていた。いずれも筆者らの過去の研究結果に出現した因子である。これらの因子を意味次元として刺激が分析された (Table 4参照)。

2) 抽出された6意味次元における5刺激間の

Table 4 選択因子と因子行列

1	尺 度 + -	F 1 情緒	F 2 力動	F 3 審美	F 4 調和	F 5 独自	F 6 弾力
1	広い—狭い		-0.360	-0.371			
★2	きびしい—やさしい						0.382
3	つめたい—あつい						0.475
4	安定した—不安定な				-0.672		
5	細かい—粗い						
6	激しい—静か		-0.767				
7	大きい—小さい		-0.552				
8	こっけい—まじめ	-0.494					
9	派手な—地味な	-0.447	-0.503				
10	自然な—不自然な			0.579			
11	高い—低い		-0.304	0.348			
12	上品な—下品な			0.676			
13	若い—老いた		-0.381	0.444			
14	美しい—みにくい			0.736			
15	むずかしい—たやすい					0.305	
16	軽い—重い	0.314					
17	正確な—不正確な				-0.620		
18	多い—少ない		-0.368				
19	愉快な—不快な	-0.484		0.312			
★20	深い—浅い					0.357	
21	まとまった—ばらばらな				-0.597		
22	近い—遠い				-0.307		
23	積極的—消極的		-0.564			0.341	
24	清らかな—不潔な			0.718			
25	短い—長い						
26	強い—弱い		-0.713				
27	すき—きらい			0.554		0.354	
28	異なり—同じ				0.510		
29	うれしい—悲しい	-0.758					
30	はりつめた—ゆるい		-0.421				0.423
31	男性的—女性的		-0.512				0.333
32	明るい—暗い	-0.760					
33	にぎやか—さびしい	-0.777					
34	個性的—平凡な					0.708	
35	良い—悪い					0.475	
36	新しい—古い	-0.339				0.584	
37	速い—遅い	-0.332	-0.572				
★38	複雑な—単純な						
39	かわいい—にくい	-0.463		0.368			
40	細い—太い						
41	楽しい—苦しい	-0.726					
42	面白い—つまらない	-0.423		0.397			
43	直線的—曲線的						0.700
44	規則的—不規則的				-0.575		
45	かたい—やわらかい						0.638
46	鋭い—鈍い		-0.471				0.380

1 : Number of scales for original data

★ : Scales changed sign

— : Selected scales for factor scores

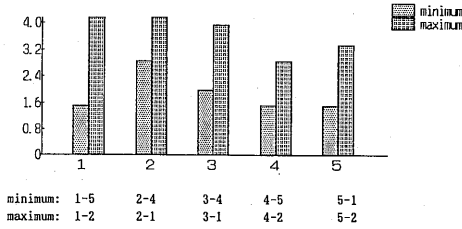


Fig. 6 各刺激における2刺激間の距離の最大値と最小値

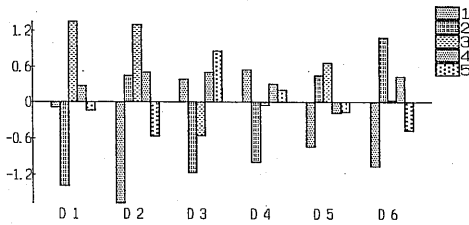


Fig. 7 各次元における5刺激の意味スコア

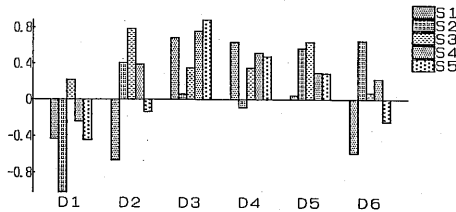


Fig. 8 各次元毎の意味差判定値

イメージの距離をユークリッドの距離で算出した結果、最大値は刺激1と刺激2の距離であり、最小値は刺激1と刺激5の距離であった。各刺激毎の最大値と最小値では、刺激1と刺激2、3の距離は長く、刺激4と刺激3、5の距離は短い傾向がみられ、作品間のイメージの差異が見られたと考えられる。刺激2と刺激4の距離の差異は、刺激2にとっては最小値であり、刺激4にとっては最大値であることから、刺激2は5刺激の作品間で一番差異が大きく、刺激4は差異が少ないと言える (Fig. 1参照)。

即ち、6次元意味空間における5作品間のイメージの差異が見られたと考えられる。

3) 意味空間における各意味次元毎の刺激間のイメージの有意差は、いずれの意味次元にも見られた。即ち、各刺激間の差異の特徴として、作品1は力動性、独自性、弾力性次元、作品2は情緒性、審美性、調和性、弾力性次元、作品3は情緒性、力動性、審美性、弾力性次元、作品4は弾力性

Table 5 各次元における2刺激間の意味スコアのtテストの結果

	1	2	3	4	
2	***				
3	***	***			D 1
4		***	***		
5		***	***	*	
2	***				
3	***	***			D 2
4	***		***		
5	***	***	***	***	
2	***				
3	***	***			D 3
4		***	***		
5	**	***	***	*	
2	***				
3	***	***			D 4
4		***	*		
5	*	***			
2	***				
3	***				D 5
4	***	***	***		
5	***	***	***	***	
2	***				
3	***	***			D 6
4	***	***	**		
5	***	***	***	***	

Note ; Numbers stand for stimuli

* : $p < 0.05$

** : $p < 0.01$

*** : $p < 0.001$

性次元、作品5は力動性、審美性、弾力性次元において、他の作品との意味の差異が見られた。弾力性次元では、作品間の差異が一番多く見られた。更に、各次元毎の作品間の差異の最大値間の方向を分析すると、作品1は、調和性協和感、弾力性柔軟感の方向にあり、対比的に作品2は調和性不協和感と弾力性硬直感の方向にみられた。また、作品1は力動性沈静感、独自性平凡感の方向で、作品3の力動性活動感と独自性新奇感の方向で対比的であった。情緒性次元では作品3は作品2に比べてより明快感の方向にあり、審美性次元では作品5は作品2に比べてより美的感の方向にあった (Table 5 & Fig. 2参照)。

以上のことから各意味次元空間における作品間のイメージに差異がみられ、作品の特徴が明確にされたといえる。

4) 各意味次元毎の意味尺度を加算して平均値を出した各刺激の意味差判定値は、作品の絶対評価として考えることができる。情緒性次元では刺激3以外は暗然感の方向にあり、力動性次元では刺激1、5を除いて活動感の方向、調和性次元では刺激2以外は調和感の方向、弾力性次元では刺激1と5以外は硬直感の方向にみられた。しかし、審美性次元と独自性次元では、いずれの刺激も美的感、新奇感の方向にみられた (Fig. 3参照)。

以上をまとめると、作品間の特徴は情緒性、力動性、弾力性次元に見られたが、全作品において審美性美的感と独自性新奇感の方向にイメージされたことは、作者の創意と演者の技術のレベルの高い入賞作品であったと考えることができよう。

3. 作品の表現運動とイメージの特徴

1) 作品1「屋根の下」

最も多く見られた運動の種類は、その場の動き、その次はステップであった。また、他の作品に比べて静止の動き、ユニゾンが多く見られた。この作品だけは、複合の動きが全く見られず、全員が時間的・空間的に同様に動いていた。また、そのイメージは力動性沈静感、調和性協和感、弾力性柔軟感がみられたのは、日常的な生活を表現しようとした作者の作品意図と関連があるように思われる。

2) 作品2「悲劇の相貌」

最も多く見られた運動の種類は、その場の動き、その次はステップであった。ユニゾンは全く見られなく、イメージも調和性不協和感の方向に見られた。これは、作品の踊り手の3人の異なる役割に関連があると思われる。人と床との接触時間の割合は作品全体の約半分を占め、他の作品に比べて多い方であり、運動の高さのレベルが低いことを示している。また、そのイメージは情緒性暗然感、弾力性硬直感の方向にあり、作品の題材や作者のコメントにある「悲劇、孤独、生き抜く、戦う」などの言葉と関連があるように思われる。

3) 作品3「SENSATIONS・感覚」

最も多く見られた運動の種類は、その場の動き、その次はステップであった。その場の動きは、他の作品と比べてかなり多く見られた。人との接触はやや少なく、ユニゾンも少なかった。この作品は、固定空間内での動作がかなり多く、他の作品との差異が多分に見られたと言える。作者は多様

な解釈で観客に見て欲しいと言っているが、そのイメージは情緒性明快感、力動性活動感、独自性新奇感の方向にみられた。

4) 作品4「北の春」

最も多く見られた運動の種類は、複合、その次はステップであった。複合は非常に多く、他の作品との著しい差異が見られた。回転は総体的には少ないが、他の作品と比べてやや多く見られた。ユニゾンは少なかったが、人との接触、床との接触は、他の作品に比べてやや多かったと言える。また、そのイメージは弾力性硬直感の方向にあったが、他の作品と比べると特別な特徴はみられなかった。しかし、やや力動性活動感、審美性美的感、調和性協和感の方向にみられた。これらは、春を待つ男女の道行と対比的な厳しく激しい北国の寒さを主題とした作品内容のために、運動やイメージの特徴が両極を同時に持ったためと考えられる。

5) 作品5「EMANCIPATE・解き放つ」

作品5の中に最も多く見られた運動の種類は、複合、その次はその場の動きであった。ユニゾンは全く見られなかった。即ち、作品の踊り手の3人が異なる役柄であったためと思われる。この作品のみ創作バレエだったが、動きの種類としては今回の分析では分類できなかったが、リフトが多く見られたのが特徴であった。そのイメージは審美性美的感が5作品中一番多く、弾力性柔軟感の方向に見られたのが特徴であった。

6) 入賞作品の傾向

(1) 作品全体に占める運動の種類割合は、ステップ、その場の動きが多く、ジャンプ、回転、バランスなどは、その作品のアクセントになっているのではないかと考えられる。

(2) 人と人との接触時間の割合、人と床との接触時間の割合は作品間に差異が見られ、これは作品内容との関連が深く、その作品を特徴づけているのではないかと考えられる。

(3) ユニゾンの時間の割合は全作品において少なく、非ユニゾンの動きで、作品に変化をつけているのではないかと考えられる。

(4) 非ユニゾン、複合運動の割合が多いのは、作品における踊り手の役柄によるものであると考えられる。

(5) 作品のイメージの特徴は、6意味次元空間における情緒性、力動性、弾力性次元に見られた

が、全作品において審美性美的感と独自性新奇感の方向にイメージされたことは、入賞作品の特徴であると考えることができよう。

結 論

本研究は、国際創作舞踊コンクールにおいて入賞した作品の傾向を、運動とイメージを分析することによって作者の意図との関連で推察することを目的とする。研究資料は、第4回埼玉国際創作舞踊コンクール決戦大会で、審査員によって評価された入賞作品の5作品が用いられた。ビデオテープに収録された作品の運動は、時間的、空間的、集団的要因から分析された。また、作品のイメージは意味差判別の方法で、大学生の作品としての刺激に反応した結果をもとに、多変量統計解析の手法を用いて分析された。その結果、次のような結論が推察された。

1. 5作品の運動の種類は、ステップ、その場の動きが多く用いられた。しかし、ジャンプ、回転、バランスなどは少なく、作品のアクセントとして用いられたと考えられる。

2. 人と人との接触、人と床との接触、ユニゾン、複合などの動きは作品によってその使用量が異なり、作品を特徴づける要素であると考えられる。

3. 作品のイメージの有意差は、意味次元空間における情緒性、力動性、弾力性次元に見られた。これは各々個性的な作品であったと考えることができる。

4. 全作品において舞踊作品にとって重要な因子である審美性美的感と、社会的な価値としての独自性新奇感の方向にイメージされたことは、入賞作品の特徴であり、作品のレベルの高さを語っていると考えられる。

5. 入賞作品の傾向は、作品の運動とイメージが作者の意図とする内容と密接に関連付けられていたと考えられる。

以上のことから、入賞作品は、各々表現運動やイメージに特徴があり、その全体の傾向は作者の創意が演者の高度な技術を通して伝達されたといえる。

それ故に、国際創作舞踊コンクールの入賞作品の傾向は、作品の表現運動とイメージを分析することによって推論されたといえる。

参 考 文 献

- 1) クリストウ (佐藤俊子訳), バレエの歴史. 白水社, 1970. (Christout, M. F., *Histoire Du Ballet*. Presses Universitaires de France.)
- 2) Humphrey, D., *The Art of Making Dances*. Grove press, Inc.: New York, 1959.
- 3) H'ドゥブラー (松本千代栄訳), 舞踊学原論, 大修館書店, 1974. (H' Dubler, M., *Dance: a creative art experience*, University of Wisconsin Press: Madison, 1940.)
- 4) 川路明, バレエ入門—バレリーナの手紙, 土屋書店, 1985.
- 5) 川路明, バレエ用語辞典, 第7版, 東京堂出版, 1986.
- 6) カースティン, ダイヤー (松本, 森訳), クラシック・バレエ基本技法と用語—第3版, 音楽之友社, 1973. (Kirstein, L., Stuart, M. and Dyer, C., *The Classic Ballet: Basic Technique and Terminology*, Knopf: New York, 1942.)
- 7) Langer, S. K., *Problems of Art*, Charles Scribner's Son: New York, 1957.
- 8) Martine, J., *Introduction to the Dance*. W. W. Norton & Co.: New York 1939.
- 9) 古保内虎夫, 「芸術作品」, 古保内虎夫 (編), 芸術心理学講座, 第2巻, 中山書店, 1957.
- 10) 頭川昭子・松浦義行・川口千代「意味空間における舞踊のイメージ」*体育学研究*, 24-4: 281-90, 1980.
- 11) 頭川昭子・松浦義行「意味空間における舞踊作品の部分と全体のイメージ」*筑波大学体育科学系紀要*, 12: 123-133, 1989.